7　与那原の綱引由来

綱は豊年祭という意味でこの糸満はやっとるわけですが。与那原というところがありますね。向こうのこの、綱が始まったのは、砂浜、浜辺ね、波打ち際で始まったんです。それにこの、与那原の綱はわらび綱やしが、この年になっても見たいっていうような歌があります。

これは砂浜で綱引をした。これはなぜ綱引を、向こうで綱引をしたかというと、昔、これはもう五六百年前の話らしいね。大城按司（うふぐしくあんじ）という按司の娘が、きれいな娘が生まれておったらしい。あの娘が十七、八になって、鹿児島の島津公に見染められたわけですね。

「いや、こりゃ立派な娘で、これに舞、教育、舞踊とかね、女に生まれては舞踊知らなければだめだから、いろいろと教育して帰すから、これは鹿児島にいっしょにやってくれ」ということで、この島津公から言われて。大城按司は、

「いや、仕方ないかな。それじゃそうしなさい」と言って、連れて行かれたんですね。

行って、向こうに行って、一年後に帰すという約束で行ったのに、約束通り帰してくれない。

その時に妊娠してしまった、妊娠。妊娠してしまったもんだから帰ってこない。便りもないからね。今度は、大城按司という按司（あじ）が、各部落のノロを集めてですね、七ヶ字（あざ）のノロ、これは久高ノロ、津堅ノロ、玉城ノロとかね、あるいは佐敷ノロとか大里ノロとか、糸満ノロ、もう一つはどこのノロだったかな。七ヶ村のね、ノロを呼んで、

「私の娘は鹿児島に連れて行かれておるが、お前たち行ってこれを連れ戻してこい」ということで、ノロを派遣したわけです。

向こう行ったら、妊娠しておる。

「ああ、たいへんだ、たいへんなことになった。お嬢さん、あんたはもう妊娠しておられるからね、あなたこれ、入れ墨を、手に入れ墨をしよう」。これが、手に入れ墨をするということは、昔、生娘でも、男に交際したらね、必ずやるんですね。入れ墨をする習慣に

なっておる。一晩でもまあ、妊娠しておるいうたから、部屋で捕まえてね、入れ墨一晩で全部やってしまった。
だからね、二日後か、島津公が見舞いに来られた時に、手は何かで包んでありますね。キレで包んであった。
「なんで手を包むか」。実はこうこうでありますと言うて、開けてご覧に入れた。その時に、
「お前は汚いことをやったな。これは誰がやった」と。ノロたちがね、
「沖縄の習慣、琉球の習慣として、男にこういう何が、嫁げばね、これはもう習慣ですからやりましたから」。これ言うた時に、
「これは汚い。連れて帰れ」と言って帰された。
けど、帰されたから、船に乗ったら、場天港に船が着いた。で、大城按司は、
「船が入ってきます」という知らせでね、駆けつけた。そうしたところが、娘はどうしたかというと、船の中で待っております。待機しております。
「実は、子どもができたんです。こうこうこう、こういうことで、子どもを産んで、そこに中にいます」。
それが男の子二人だった。これを、向こうから来る時に船の中で出産をしたんですね。男の子二人だったんですね。
「こうこういうことです」と言うたら、
「何、そんなことか。絶対この、城には足を入れちゃいかない。お前これ、連れて帰れ」と言われた。それでその、娘がね、
「城には絶対に足を入れるなとおっしゃっている。私はもう親がそういうことおっしゃれば、生きる望みはないから」と、二人の子どもを抱いて海に飛び込んだ。海に飛び込んでしまって。
「これ、助けろ、助けろ」ちゅて、この子たちの着物に、それから入って行って助けて。下はもうこの、魚に食われて。渦を巻いとる、魚がね。巻いとったもんだから。下は、海の底はみな魚です。マチという魚。これが下を巻いておりました。それからにわかに波が荒れた。風が荒れたらしいね。これも偶然ですけども。風が荒れたもんだから、船がもうどんどんどんどんね、何して。これはもう、おかれんで、とうとうこの船は波打ち際に打ち寄せられて、浜辺に来た。

その人はずっと沖のほうで亡くなったんではないか。だけどこれ、探されない。そういうことで、波が荒れたから大変ですって。みな、村の、この与那原の人がね、大騒ぎして、どうすればよいかと。
「いや、これは、首里のビンの御嶽というところがある。そこにお寺がありますね。そこに坊さんがいるから、あの人の前へ行って、何か習って来い」と。そして、馬に乗って習いに行ったら、坊さんがいわく、
「いや、これは綱をね、女綱（めづな）と男綱（おづな）とね、作ってこう、綱を浜で引いて、綱引をして。その頭と尻尾から切って、それを海に投げて供養しなさい」ということを言われた。そうしてこの、それをやったんですね。供養したわけですね。そしたら、これも偶然で、またこの波が次第次第に静かに、風も止んだ。止んだから、それでその、死体が浮かんだとか、いうことで、今でも綱引をする時は必ず頭のほうか尻尾のほうから、綱のですね、切って海に流しますよ。

字糸満　田場天龍